

## スーパーグローバルハイスクールの取組 ～高大連携による課題研究～

田中 千寿\*<sup>1</sup>・森本 真央\*<sup>2</sup>・山下 玲奈\*<sup>2</sup>  
徳島県立城東高等学校

### 1. はじめに

2014年度から始まった文部科学省のスーパーグローバルハイスクール（SGH）事業に、本校は全国から選出された56校中の1校として指定を受けた（現在123校）。この事業は、急速にグローバル化が加速する現状を踏まえ、高等学校段階から社会問題に関する関心と深い教養に加え、コミュニケーション能力、課題解決能力等の国際的素養を身に付け、将来、国際的に活躍できるグローバルリーダーを育成することを目的とするものである。

本校のSGH構想は「四国徳島発・人類の健康と環境に貢献するグローバルリーダーの在り方について」。グローバルリーダーに求められる資質を探究していくにあたり、「四国徳島発・グローバル企業の創造戦略について」を研究テーマに、課題研究を進め、自分たちが考える「グローバル戦略」や「CSR活動」などについて考察する。この取組の1つは、「教育課程の特例」を生かした学び、もう1つは「外部連携」の取組、大学や企業、国際機関と連携し、グローバルリーダーに必要な態度・素養の習得を目指すものである。

今回は、スーパーグローバルプログラム（以下、SGプログラム）と課題研究、その成果の発信について報告する。

### 2. SGプログラムについて

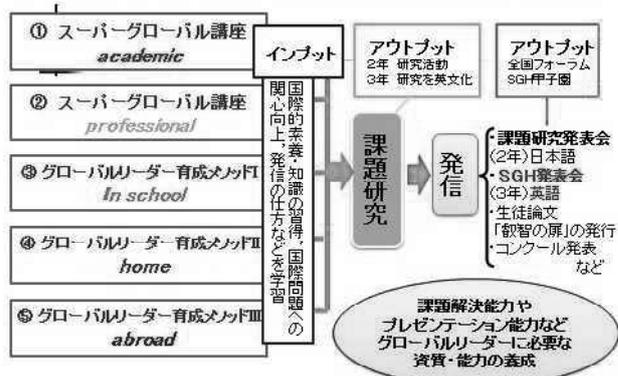
#### 1) スーパーグローバル講座 academic

大阪大学大学院国際公共政策研究科・徳島大学との連携による講演や課題研究のサポートを中心とした、大学の講師陣による講座の開講。

#### 2) スーパーグローバル講座 professional

県内に本社を置くグローバル企業、大塚製薬・日亜化学工業と連携して実施する講演、企業研修・国際機関訪問及びインターンシップ等の実施。

### I SGプログラム→II 課題研究→発信



### 3) グローバルリーダー育成メソッド I in school

#### ① 学校設定科目

1 学年全体に「クエスト」で、スーパーグローバル講座 academic や professional（以下SG講座）の事前・事後指導に、KJ法やフィッシュボーン等のシンキングツールを活用することによって論理的思考力を高め、協働的学習によって国際的素養の育成を充実させた。2 学年の「クエスト」は課題研究そのものに取り組んだ（後述）。3 学年「グローバルリーダー論 II」で2 学年の「課題研究」を更に深化させ、限られた授業時間の中で、英語論文を作成し、「SGH発表会」（7月）で英語発表をすることができた。

#### ② 英語運用能力の育成

TOEIC 全員受検、CAN-DO リストによるパフォーマンステスト、Essay Contest の実施、英検などの受験対策指導等。

#### 4) グローバルリーダー育成メソッド II home

中央省庁（外務省・文部科学省等）や国内の国際機関（FAO, JICA, WHO 等）を訪問しての調査・研究。

#### 5) グローバルリーダー育成メソッド III abroad

フランス研修（姉妹校交流）・インドネシア研修による海外での調査・研究。特に、大塚製薬海外拠点・工場等での調査・研究、インターンシップ、小学校での環境啓発活動及び現地高

校生との共同研究等。これらは本校の研究課題テーマに沿った取組であり、その成果は「課題研究」での発表へとつながった。

### 3. 課題研究について

#### 1) 課題研究の高大連携

S G H指定後、管理機関である徳島県教育委員会が徳島大学国際センターと本校との連携をお願いし、担当の橋本智教授の御尽力により、次のような高大連携プログラムが実践できた。

- ①論題設定に関する徳島大学豊田哲也教授・渡部稔教授による講演（計2回）
- ②徳島大学教授陣からの課題研究指導（計3回）
- ③「英語プレゼンテーションについて」徳島大学田久保浩教授による講演（1回）

#### 2) 成果発表

- ①S G H課題研究発表会（参加1・2学年 645名及び学校関係者、発表は2学年代表班10班、海外研修班）及び生徒論文「叡智の扉」発行
- ②S G H発表会（参加は全学年人文社会コース102名及び学校関係者、発表は3学年人文社会コース代表班4班、海外研修班）及び生徒論文「English Research Paper」（英語）発行

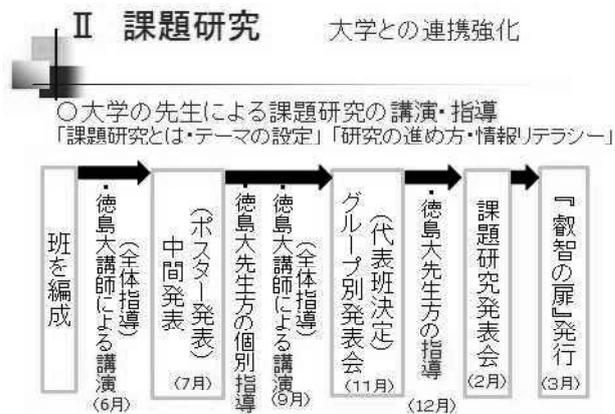
#### 3) 課題研究の実践

2学年の「課題研究」では学年団で指導する体制を整え、基本「クエスト」1単位の35時間とホームルーム活動及び特別時間割で実施した。まず学問分野別に9グループに分かれ、その中で3～8人の班ごとに研究を進める。成果は生徒論文集「叡智の扉」（第9号）を作成し、代表班が課題研究発表会（2月）を行った。マインドマップによる論題の決定（5月）後、講演「課題研究とは」（豊田教授6月）、「情報リテラシー」（渡部教授9月）と個別指導としてグループ別中間ポスター発表（7月）・グループ別プレゼン発表（11月）の際、各グループに1名の徳島大学講師に指導を仰ぎ、代表班指導（12月）は、文系は豊田教授、理系は渡部教授に指導いただき、内容を充実することができた。

#### 4) 課題研究の検証

「ルーブリック評価」で、生徒にも指導する教員にも到達点を示すことによって、個々の資質を向上させることができた。同時に、自己評価・相互評価を行い、生徒の活動が論文作成の技や発表の技を身に付けている時間的な経過・変容を知る方法としても利用できた。特に、プ

レゼンテーション力の向上が顕著であり、総括として、インプットしてきたものがアウトプットできたことが、取組の大きな成果としてあげられる。



### 4. 最後に

人文社会コースが主たるS G H対象生徒となり、学校設定科目の取組を「クエスト」の中核に置き、更に高大連携の取組によって「課題研究」が充実したものとなり、英語発表へと深化した。今後も、「健康」と「環境」をキーワードに高校生が考える「四国徳島発・グローバル戦略」等の提案ができるよう、改めて「グローバル人材とは」「生徒にどんな力を付けたいか」を学校全体で検討し取り組みたい。

(生徒発表要旨)

論題「演劇教育で日本人はローコンテクストに対応できるのか。」

各文化が持つコミュニケーションスタイルは、「ハイコンテクスト」、「ローコンテクスト」という概念によって大きく2つに分類することができる。中でも日本は極めてハイコンテクストであるといわれている。しかし、様々な人種や文化、宗教などが存在するグローバル社会において、ハイコンテクスト型コミュニケーションが通用するとは考えにくく、ローコンテクスト型コミュニケーションへの対応が求められるのではないだろうかと考えた。そこで私達は、それに対応する方法として「演劇教育」を提案する。

\* 1：徳島県立城東高等学校教諭、\* 2：徳島県立城東高等学校第2学年

口頭発表